

わかば

2021. 1. 23
(令和3年) 第20-36号

文責 校長 保谷 力

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

教育目標 「帰国後、日本の教育に円滑に適應できるよう、日本の学校における学習指導要領に沿った国語、算数(数学)の学力の維持、併せて生活・生徒指導を行う。」

重点目標 一人一人の笑顔輝く学校づくり～期待登校・満足下校～



入園・入学説明会をおえて

校長 保谷 力

先日、16日(土)にポートランド日本人学校の幼稚部、小学部の入学説明会を行いました。今年はこうした状況の中、対面による説明会が行えず、やむを得ずオンライン形式による実施となりました。

会の冒頭で私が申し上げたことは、ポートランド日本人学校は「日本の義務教育学校とは大きく異なっていること」についてです。ともすると、入学したら後は学校に全てお任せするといったお考えのご家庭もあるように思いますが、ここは日本国内の義務教育学校ではなく、日本人商工会が運営している私立学校であることを重々ご理解いただき、入園・入学を希望していただきたいと申しあげました。したがって、お子様の学力はご家庭が責任をもって、その維持・向上を図ること、学校はあくまでも週に一度の補習を行うことなどです。もともと、国内の小中学校で年間200日以上授業日数をわずか47日程度で行うわけです。つまり国内小中学校の一週間分の学習を1日で教えるわけです。家庭学習なくして学力の維持・向上は考えられません。また、幼稚園についても、こうした小中学校への進学を見込んだ前段階の機会となることから、ひらがなやカタカナの学習も自ずと入ってくるわけです。

いずれにしても、現在はオンラインで授業を行っておりますので、本来の学校の機能が十分に果たされていないのは事実です。ポートランド日本人学校では、このコロナ禍における危機的な状況から子供たちの最低限の学力を守っていくことを中心に現在運営されております。



「故郷」魯迅の小説を読んだ感想文

中等部3年生は「故郷」(魯迅作)を読んで、様々な思いや感想を寄せてくれました。今回は4名の読書感想文を掲載いたします。

※魯迅は中国の小説家、思想家で「もともと地上に道はない」などの名言を残した人物としても知られています。「故郷」は、魯迅の代表作ともいえる短編小説のひとつで、中学3年生の教科書に載せられています。主人公「わたし」は、魯迅本人の経験が基になっているそうです。(校長)

「故郷」読書感想文

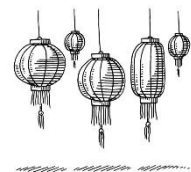
中等部3年 河野 和希

主人公は二十年ぶりに故郷に帰ってくる。彼が帰郷した訳は、かつて地主であったが今は没落してしまった生家の家財を引き払う為であった。その故郷は主人公の思い出とは違い、色あせて土地だけでなく住む人の心も貧しく荒れ果てていた。

主人公は、子供の時によく遊んでいた雇い人（マンユエ）の息子、ルントウとの再会を楽しみにしていた。しかし、実際には地主階級と雇い人という悲しい身分の壁を突き付けられる。しかしながら、甥のホンルとルントウの五男のシュイションの交流に希望を見出す話。

私はこの単元を読んで、身分の格差がある時代に、その格差を超えて本当の友情を育んでいくことの難しさを感じた。主人公は、きっと甥のホンルやシュイションが大人になった時、身分の格差のない社会になっていることを望んでいたと思う。

今の時代も格差はきっとあると思う。しかし、人はいつも希望を持ち、より良い社会を作りその社会で生きていけることを望んでいるのではないだろうか。



「故郷」を読んで

中等部3年 ストーンレイク美明

魯迅の「故郷」を読み、私は子供の純真な心を強く感じた。この話では、主人公の「私」が、30年ぶりに故郷に帰り、少年時代の友達、ルントウと再会する。20年間ルントウと「私」は全く違う世界で生活を送っていた。再会の場で幼い頃のルントウとの思い出がよみがえり、何も話すことが出来ず「私」は悲しむ。

なぜ、子供の時なら普通に友達になれたのに、今ではもう話すことが出来なくなったのだろうか。ルントウは「私」とは違い、貧しい家族で農業を営んでいる。一方、「私」は知事で、裕福だ。しかし子どもの頃は、遊び相手がどんな人なのかだけが大切で、相手の家族の社会階級や身分は気にしない。だから「私」とルントウは幼いころはすぐ仲良しになれたのに、20年後再会した時は、話も出来ず、心が通じなかった。

このような子供にしかない純真で無邪気な心は、いつなくなるのだろうか。

人生の中で色々な経験をするに従って、人は少しずつ世の中のことを知り、身の回りの事についてもっと気が付くのだろう。それにつれ、自然と周りの人々の社会階層などを意識し始めるのだと思う。あまりにも違う世界に入り込んだ大人同士はもう共感できることが少なくなる。そのため、ルントウと「私」が再会した時、彼らは何も話せなかったのではないだろうか。

私が大人になった時、同じ様な事が起こるのだろうか。今の私の生活の中で、「故郷」の中のルントウと「私」の様な社会階級の異なる関係はないと感じる。私の回りにはルントウのように畑で働く人はいない。ルントウと「私」のような関係を持ったことはないけれども、私自身も歳を重ねるにつれもっと身の回りのことに気づき始めている。

子供にしか持てない純粋さと無邪気は大切だ。その頃は偏見を持たずに、誰とでも仲良くできると思う。お互いに子供であるという事実だけで、共感できるのだ。しかし、大人になるにつれ、身分や社会階層の違いで人々は共感できにくく、ますます離れてゆくのだ。これは、人間社会における避けることのできない残念な事実かもしれない。



故郷

中等部3年 ヤーブロウ 希空

僕が「故郷」を初めて読んだのは数週間前だった。読んだときは読めない漢字が多く、分かりにくい場面が多かった。しかし、少しずつ読んで理解していくと、主人公の「私」の気持ちが分かるようになった。話の内容、宿題も分かって理解できるようになった。

「故郷」は魯迅の代表作ともいえる短編小説の一つで、20年ぶりに帰ってくる主人公の「私」の話だ。様々な人と再会し、いろんな思いや感情がわいたのだと思った。この単元「故郷」は、ただ自分が生まれ育った場所というだけでなく、心のよりどころであり、自分が安心し、自分が信頼を持てる場所だと僕は思った。また、昔の友達、「ルントウ」に出会えて嬉しいと思っていたのに、案の定、身分社会の影響で、故郷と同じように変わってしまったルントウを見てしまった。嬉しいのだけれど、何とも言えない悲しい思いをしたのだと思う。「ルントウ」の外見だけではなく、中身、性格も変わったのだろうか。

主人公は「甥のホンルとルントウの子シュイション、彼らには、私たちの経験しなかった新しい生活をもって欲しい」と願っていたのだと思う。

故郷を読んで



中等部3年 岡本 汀

僕が故郷を読んで、まず考えたことは、僕の故郷はどこなんだろう。ということである。僕は、カルフォルニア州のサンディエゴで生まれたが、生後3ヶ月でオレゴンに引っ越してきた。悲しいことに、サンディエゴのことは何も覚えていない。そう考えると、毎年夏に帰る、日本の祖父母（おじいちゃんとおばあちゃん）の家が、僕にとっての故郷になるのではないかと思う。

僕は、日本に行くことが毎年とても楽しみだ。祖父母はもちろんの事、いとこやおじさん、おばさん、とにかく皆が、とても温かく迎えてくれるからだ。僕にとって、故郷と呼べる場所は、温かく、安心できる心のよりどころだ。

魯迅の「故郷」では、そのように大切な場所が変わってしまったと気づいた「わたし」は、とても辛く悲しかったと思う。特に、幼馴染みのルントウとの関係は、幼い頃にはまったく対等だったのに、今、ルントウは「わたし」を「旦那様」と呼ぶ。そんな呼び方をされて悲しい気持ちになり、格差のある現状に対して複雑な思いをしたのではないかと思う。

故郷から帰る時、ルントウの息子シュイションと仲良くなった「わたし」の甥のホンルが「またシュイションと一緒に遊びたい。」と言っていると聞いた。主人公「わたし」は、彼らの将来は、相手を「旦那様」と呼んだりする格差のない世界になってほしいという強い希望をもったのだと思う。

「わたし」は、ホンルやシュイションが、身分に関係なく仲良くなっているのを見て、経済的に安定し、人々の心も豊かになり、また身分関係なく、人と人との心を通わせることが出来る世界を望んでいた。このことから「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になる」という言葉を残したのだと思う。「希望を持つ人が多くなれば、実現することが出来る」という意味なのではないかと思う。